

# 理事長あいびつ

静岡県作業所連合会・わ 理事長 三輪 浜子

今年度も、第四回作業所学会が令和四年十二月十日（土）にリモートにて開催することができ、コミュニケーションの手段、資質の向上、ネットワークの構築等の確保に意欲的に取り組むことができました。会員の皆様のおかげと感謝申し上げます。

さて、年度の活動も無事終盤を迎えました。今年度は福祉事業所としても様々な事にアンテナを張る必要があったと思います。

一つは精神科病院での虐待事件、園児の車両置き去り等痛ましい事件を踏まえ、私達福祉従事者として更に意識を高める必要があります。運営の在り方、チェック機能の在り方を見直し、検証され質の高い支援が出来るよう研鑽を重ねる必要を認識して、二つ目に「適格請求書保存方式」インボイス制度導入という、事業者間の製品やサービスの取引時にかかる消費税の新ルールが適用される事を受け、様々な角度から検証し判断、実行をしていく事が必要と認識する等様々な事がありました。

また、令和元年十二月以降から世界的に広がってきた新型コロナウイルス感染は第八波まで拡大し、回波を増す度に事業所内に大きな爪痕、不安を残したり、原油価格高騰や物価高騰等事業所運営、利用者様の生活安定が脅かされたり、問題が山積している中で作業所としての機能を維持する為に、対応と対策に心を砕き多忙な日々を過ごしてきたと存じます。

このような環境の下、『障がいのある人がひとりの市民として地域に生きてこそ「ふつうの暮らし」である』という指針は作業所の揺るぎない理念です。作業所は、障がいのある人たち一人一人の尊

厳と権利が尊重される場であると共に、地域社会の一員として、働き、暮らしていく拠点としての役割を担うことで、地域の人々、関係者と共にインクルーシブな社会を実現してきました。

そこで、日々の営み全てを相互に尊重していく為に『作業所学会』で学び、気づいていく事を目的に、午前中は神戸大学大学院、稲原美苗准教授の『当事者から考える障害者支援』講演から本場に当事者が必要としている支援は何であるか、当事者たちの声なき声をしつかり聞き、対話を重ねることの重要性を導いていただき、午後の分科会、全体会では「作業所としてのトータルな支援とは」と題して、生き生きと暮らすために各作業所が工夫している支援について多くの意見を発表して支援者と利用者という立場ではなく人対人の関係性をどのように築き上げていくかを様々な視点から議論していきたいと思えます。

この学会を通して、障害の有無にかかわらず人として経験値を増やし、自己決定の幅を広げ、自分も相互依存する社会の当事者であり、忘れがちな謙虚な気持ちと姿勢について再認識ができるものだと思います。

最後に、日々の実践を「作業所学」として昇華し、共に学び合い、発信していく共同意思決定の場となるよう継承していきたいと思えます。相手を思いやる気持ちや曖昧性を理解する、問題行動を起こす相手の立場を思って考え抜く、利用者も支援者も気持ちを開示しお互いのことを受け入れることで、インクルーシブな社会に繋がる事が出来ると信じております。